

【執筆者の紹介】

昭和五十七年、全抑協岐阜県連合会発足以来、本部役員として会勢の拡大に努力をされ、財団法人以降は支部の事務局長として活躍、岐阜県支部の活動の中心人物として、その行動を高く評価しております。

彼は誠実な人柄で地域に密着、自治会、上絵付加工組合の理事、県立高校のPTA会長を務めるなど多くの役職を歴任、厚い信頼を得ておられます。

現在は悠々自適の毎日で、良き家庭に恵まれてうらやましい限りです。小生のまたない相談相手であります。

(岐阜県 鈴木 善三)

シベリア抑留記

愛知県 近藤 昌三

一、入隊前の略歴

私は大正十五（一九二六）年、名古屋で生まれた。

中学校入学の前年に蘆溝橋事件^{ロコウキョウ}、中学卒業の前年に日米開戦となった。名古屋市立商業を昭和十七（一九四二）年暮れに繰上げ卒業となり、縁あって某綿花貿易会社の中国研修生として中国へ渡った。北京で約十カ月の中国語速成教育の後、河北省石家荘近くの農村駐在員となり、電気、水道もない田舎で中国人職員を使い、八路军ゲリラによる殉職覚悟で約一年半、綿花収買に従事した。

二、北支派遣軍入隊、終戦

徴兵年齢の引下げにより、昭和十九年、石家荘にて検査を受け、昭和二十年四月一日、山東省張店の部隊に入隊した。約五十人の新兵は、張店近郊の分遣隊にて教育を受けたが、三八式歩兵銃は支給されず、鹵獲^{ロウカク}銃^{じゅう}で教練を受け、専ら対戦車肉弾攻撃の訓練だった。

第一期の検閲を受けて配属された部隊は「北支派遣独立歩兵第四二九四部隊」で、山東省泰安付近にいたが、七月下旬、列車にて移動。一旦南朝鮮に入ったが、北上して北朝鮮咸興付近に駐屯中、終戦の玉音放送を聞くこととなった。武装解除されたが、軍規は正

常で興南の日本窒素工場の在庫品の積出し作業をやらされた。わずか四カ月半の軍隊生活だった。

三、シベリア連行

昭和二十年九月下旬、いよいよ日本帰国のため、興南港から乗船。物資不足の祖国へ持ち帰るべく、甲板まで食糧満載の船だったが、それはソ連のバラ積み貨物船。大船倉の底に折り重なって積み込まれた我々は、食事も水もなく、トイレにも行けない一夜を明かすことになった。しかし、その一夜の夢はソ連船員の略奪によって破られた。夜半、真っ暗闇の船倉に、懐中電灯とピストルを持った数人が乱入、「ダワイ、チャスイ」「ダワイ、ダワイ」我々の腕から時計を強奪、ピストルをかざして無理矢理に私物袋を開けさせ、万年筆からきれいな柄物の風呂敷まで、目ぼしい物を洗いざらい強奪して行った。そして船が着いて下船を命ぜられた町は、ウラジオストクの軍港が見える海岸だった。敗戦国の兵隊がそのままスムーズに帰国できると思うのが、そもそも間違いだと言われればそれまでだが、思えばその後何回もダモイ、ダモ

イを餌に重労働を強いられ、何万もの戦友がシベリアの土となってしまったのを忘れてはならない。とにかく、この時を境に我々は、その意思や希望が全く通用しない世界に連れて行かれてしまった。

四、アルチョム炭鉱

上陸した私たちに下された命令は、「これから五十キロ歩いて宿舎に入り、帰国船を待つ。この行軍に落後したらもう後続はないから置き去りだぞ。絶対について来い」というものだった。船の中で食事は支給されなかったが、甲板に積んだ干しメンタイがあったのが幸いだった。どのくらいの落後者が出たか。その人たちはどうなったか。抑留者名簿にも載っていないのではなかろうか。幸い我々の分隊は落後者もなく到着地に着いた。一体ここはどこなのか、全く分からず、我々はここで一週間程、雑役と野宿をした。十月の初めだったと思うが、ここではもう厳寒である。テント生活の我々は、持っている衣類すべてを身につけ、帽子、靴下はもちろん、編上靴まで履いて横になりまどろむ夜が続いた。この頃はまだ収容所（ラーゲリ）の

設備がなく、寒さにおびえながらのテント生活。古い倉庫のようなバラックを修理し、そのまわりに穴を掘って杭を立て、有刺鉄線を張りめぐらし、監視のやぐらを立て、自分が入るラーゲリを自分の手で作ったのだ。穴掘りが大変だった。凍った地面はつるはしも尖った鉄棒も全く受けつけず、カチンカチンとはね返してしまふ。仕方がないから木片を集めて来て火を焚き地面を溶かすのだが、なかなか溶けるものじゃない。やっとラーゲリのさまになったら、いよいよ本格的に強制労働だ。ここはアムチョムという炭鉱町だった。

五、炭鉱労働

軍隊は「運隊」だが、シベリアはさらに「運」次第だった。厳寒という言葉では言い表せない酷寒の地上で、木材伐採などの重労働につかせられ、抑留者の死亡率は物凄い高率だったに違いない。私がこうして無事に帰還できたのは、もちろん現役兵の若さの特権があったのは間違いないが、炭鉱という恒温の地下、しかも換気坑道係という比較的楽な労働に配属されたこ

とが一番の幸運だった。一年七カ月のシベリア生活は私を運命論者にした。

アルチョムラーゲリから炭鉱まで往復の一、二時間の酷寒を辛抱すれば、地下は天国である。しかし、炭鉱内の作業割当で「運」が決まるのだ。

名古屋育ちの私は、炭鉱というものを初めて見た。大きなボタ山の隣に鉄塔があり、最上端に大きな鉄の輪が回転している。この輪がワイヤーを巻き上げ、堅坑の中のゴンドラを上げ下げする。この堅坑の終点、地下二百メートルの終着点から東と西へ二本のメイン坑道は伸びて、最前線の現場（切羽）まではそれぞれ千メートル以上あるという。メイン坑道は四方がコンクリートで固められ、東西にレールが伸びて、その上を石炭ワゴンを引いた電気機関車が轟音をあげながら走っている。このメイン坑道に並行して換気用の坑道があり、所々で主坑道と繋がっている。そこには直径一メートル以上ある大きな送風機と木製の扉があり、この送風機で主坑道のカスや汚れた空気を吸い出す。扉の横にはソ連のおばちゃんが座っていて、送風機の

運転と扇の開閉を見張っている。私は作業割当てこの換気坑道係となった。ゴッホの自画像に出てくるようなシンガリオフという老人（といっても五十半ばだろう）とペアで坑道の修理保全が仕事。換気坑道はコンクリートでなく、土のままだ。左右と上は坑木で組んである。

我々の作業は、落盤によって崩れた坑木の組み直しや、地圧によってせりあがる地面を掘り下げること。その日の作業はシンガリオフが決めるが、坑木は古いものを地上に上げ、新しい木を下ろして来て組み直すのだ。残土も地上へ上げなければならぬ。切羽のように落盤の危険は少ないが、それでも時にはある。坑木の運搬も、その組み替えもなかなかの重労働だ。だが一番の問題は「灯」だった。我々はもちろん、ソ連人の灯も全部「カンテラ」だ。我々日本人はマッチがない。言葉も通じない。一旦、灯が消えたら真っ暗闇、しかも人氣のない換気道、送風機の風でカンテラの灯はいつもゆらゆら揺れていて心細いことこの上ない。シンガリオフが近くにおればまだましだが、一人

の時、灯が消えてしまつて、絶望の淵に落ち込んだことも一度ならず味わつた。

切羽の落盤で命を落とした戦友も多い。そして一番の重労働は堅坑の下のリフト係だ。切羽から次々とやってくる石炭ワゴンをも、上から下りてくる空ワゴンに、一台一台ゴンドラの中で力いっぱいぶち当てて入れ替えるのだ。堅坑の中はもちろん地下水でいっぱい。リフト係の作業場は滝のような地下水。スペースが狭いので一人でしかない。このリフト係の悲運、何人が無事帰還されたのだろうか。

六、飢餓との闘い

テント生活時代はもちろん、ラーゲリに入ってから、我々に支給される食事はシャビシャビのスープとわずかの黒パンだけだった。スープはその後コーリヤンの粥になったが、その濃さ、具の多寡は全員の一番の関心事だった。私は今でもラーメンやうどんを食べ、最後に井に残った汁の中にゆらゆらとゆれるうどんの切れ端や菜っ葉を見る度にこのシベリア生活を思い出す。本当にあの頃は餓鬼だった。この切れ端が一

分でも二分でも長くこの命を持ちこたえさせてくれるかもしれない、隣の戦友の飯盒の中と見比べ、畜生、俺の方が具が少ないようだ、と浅ましい考えにとらわれたことがあったことを白状せねばなるまい。

とにかく、食事の分配は大変だった。受領して来た粥とパンは、分隊全員十数人が目を皿のようにして見守る中で、当番が慎重に各々の食器（飯盒、後には全員缶詰の空缶になった）に注ぎ分け、パンを切り分け、隊長以下幹部の検閲を受けるのだ。右から三番目の缶は具がちよっと多過ぎるぞ、一番左のパンは少し小さいぞ、隣から少し削ってやれとか文句が付き、やっとOKが出ると、今度はこれをどんなふうにして食べるか、それが問題だ。黒パンの上部の盛り上がった表面はカチカチで、ナイフではとても刃が立たない。内側はねっとりとし水気を含み、少し酸っぱいような味だが、慣れると病みつきになる。上部のカチカチ部分は水分が少ないから目方も軽く、何よりも腹持ちがよいような気がする。この部分が誰に当たるか、全員の関心事だ。内側の軟らかい部分は冷たいままでは

まずいし食べにくいから、ベチカの上で焼くか、スープに入れて煮るかになる。とにかく、食べることで以外には差し当たって考えることはないから、全員が知恵と労力を出し合い、情報を交換するのだ。ただし、ベチカの上で焼く場合、目を皿のようにして見張っていないと、ちよっと目を離したらパンが消えてしまっていた、なんてことがちよいちよい起こる。食事の時にはこのベチカのまわりが満員の人大かりになり、順番の取り合いになる。

我々が苦勞したのはパンの保管だ。パンは一日一回の配給だが、その量は一食分にも足りないのである。だから、これを何回に食べるか、また、残しておくとするればどこにどう隠しておくか、作業に持って行くとしても、布も紙もない我々にはただ裸のまま雑糞に入れるしかない。いざ食べようとなるとパンの半分はポロポロのカケラとなってしまう。雑糞の底を掻き集めて口に運ぶ姿は我ながら情けない。

二年目になると食事はノルマ制になり、パンは食券を持って行ってソ連人のおばちゃんからもらうように

なった。その日のノルマの達成率によって決められた量のパン券をもらうのだから、一人一人その量が違う。作業の帰りにソ連監督からその日のノルマ達成券をもらい、食堂のおばちゃんに出す。銀行の窓口のような仕切りの向こうで、おばちゃんは天秤に重りをのせ、もう一方の皿にパンを切つてのせるのだ。おばちゃんは天秤がきっかり水平になるまで、きつちりとパンを切った。のせたりおろしたり、サイコロのようなかけらまでしっかり量るのだ。次は砂糖、天秤の皿の上に小さな紙をのせ、その上に小さじ一杯ぐらいの白砂糖を量ってくれるが、もちろん貴重な紙はもらえない。私たちはそれを空き缶で受けて持ち帰るのだが、べろりとひと舐めで終わり、残しておく気にもならない。

七、マローズとトイレ

幸いにもアルチョムは沿海州の南端、極北や内陸ではなかったから零下四〇度以下になるのは稀だった。厳しい寒さをロシア語でマローズと言うが、マローズで零下四〇度になると屋外作業は免除になるそうだ。

しかし我々は地下の炭鉱だから、その特典はない。我々の入出坑は地上と坑内を結ぶ堅坑一本に頼るしかないが、その堅坑は滝のような地下水だ。坑内の暖かさに気が緩んで出坑の際衣服を水に濡らしたり、濡れているのに気がつかずにいると大変だ。すぐ凍傷にやられる。ひどい凍傷は組織が腐ってしまうのだ。

シベリアに入ってラーゲリ住まいになったが、我々に衣料は何一つ支給されない。襦袢と股下だけはシラミ退治の熱気消毒のため交換されることがあるが、襦袢、靴下、手拭など全然支給がない。古年兵と違って我々初年兵は私物の衣料など全くなく、官給の手持品だけだ。大切に大切に使っても、いつかは破れて遂にはなくなってしまう。一番困ったのは靴下だ。シベリアの冬を綿の軍隊用靴下一枚で過ごすのは無理だ。手持ちの布切れ、手拭でも何でも手当たり次第に足に巻きつけ靴の中に押し込む。布切れもとうとうなくなると、もう仕方がない。襦袢の一番下の部分を切り取って足に巻く。どうせもうじきシラミ交換だ。シャツがだんだん短くなってゆく。

最初の冬、支給された外套を見てびっくりした。茶色の麻袋のような布地、襟には兎の毛皮がついているが、その色といい形といい、全く明治時代、陸軍創世記の遺物のような代物。これは一体どこの国からの占領品だろう。韓国併合前のものと北朝鮮から持ってきたのだろうということになった。この外套、なるべく大きいのが奪い合いになり、早速、解体作業が始まる。袖口、裾、だんだん短くなり靴下や手袋（鍋つかみのようなものだが）に化ける。この外套、初めは膝の下まであったものが、日が経つにつれ膝上になり、ハーフコートになり、とうとう普通の上衣の長さになってしまった。

ラーゲリから炭鉱までは徒歩一時間近くかかる。炭鉱は休みなしの三交替制で、一週間ごとに入坑時間が変わる。切り換えの日は四時間くらいしか寝る時間がない。ラーゲリ出発はほとんど早朝か夜半の暗闇だ。ラーゲリの門の内側広場、五列縦隊に整列して人員点呼を受けるのだが、ソ連コンボイ（警戒兵）は何回勘定しても数がつかめず出発できない。ソ連兵の頭の悪

さ、これはどこのラーゲリでも同じだったらしい。淡い裸電球の下、零下何十度の地面はカチカチに凍っている。ありとあらゆる布切れを巻きつけた足をむりやり革の編上靴に押し込んだ捕虜たちは、カチンカチンの地面の上で足踏みせずにはおられない。凍傷にでもなったら一大事だ。コンボイは行ったり来たりを繰り返す。毎回これだからやりきれない。これはヘタをするとも帰りも同じで、毎日がその日の運次第である。そして帰りには石炭の塊りを脇に抱えて帰る。これはラーゲリのベチカ用である。暗闇の中、コンボイの懐中電灯に先導されて炭鉱までの往復は大変である。なぜか？ 我々の隊列の前後左右にはマンドリン（自動小銃）を下げたコンボイが固めている。我々は暗黒の中、凍って滑る地面に注意しながら眠気を我慢して前者の後ろについて行くしかないのだが、ついうとうとして、うっかり横にそれ、道より一段低くなっている畑に転げ落ちてもしようものなら、コンボイのマンドリンがバリバリバリと火を噴きかねない。逃亡者と見なされて命をなくした戦友があるとのこと、十分気

をつけるようにと隊長のきついお達しだ。

汚い話で恐縮だが、厳寒で困るのはトイレだ。トイレは、まず広さがテニスコート半分位の穴を掘る。深さは二メートル以上ないといけない。半メートル位の間隔にトイレ用の丸い穴を開けた板を敷けば、これがトイレになる。屋根はあるが、扉や囲いは何もなく吹きさらしである。そして、ソ連人からもらった煙草巻き用の名刺大の古新聞、ない時はなるべく柔らかで大きい木の葉を持ってその上に跨がるのだ。朝はこのトイレに何列もの縦隊ができる。前後左右裸の尻に囲まれ、前の者の尻を眺めながらの用足しだ。後の者は私の尻を眺めていて、所々で会話が聞こえてくる。

トイレの汲み取り設備はないから、満杯になるとここに土をかぶせてしまえばよい。しかし冬は大変だ。大便是すぐに凍って筍のように鋭く上に伸び、糞塔になり、遂には板の穴の上に頭を出す。こうなるともうその穴は使用できなくなるし、地面も凍って穴を掘るのは不可能だから、その糞塔を碎いて穴から出すより方法はない。この当番は全員回り持ちで、初年兵の私

は当然一度経験させられた。

自分の背より数十センチも高い糞塔が林立する有様は、まさに石筍の並ぶ鍾乳洞だ。つるはしは振り上げられないから、金剛杖のような重くて頑丈な鉄棒で糞塔と格闘する。ルームと呼ぶこの鉄棒の鋭く尖った先端を糞塔の根本に打ち込むのだが、マローズの糞塔は無情にもカチンカチンとはね返し、糞の粉を飛び散らすだけだ。やっとのことで太い糞塔を倒すと今度はそれを短くして、やっとのことで外に放り出す。さらにもう一つ、最後はその糞柱を抱きかかえてラーゲリの外へ捨てに行かねばならない。

作業用の特別な衣料もなく、普段の服装での使役だ。寒い戸外はよいが、一旦室内に入り暖まると、帽子、服、手袋、体中にいっぱいいた糞塵が一斉に溶けだし、たまらない臭気が部屋中に充満するが、これらに誰も文句を言うわけにはいかない。

八、シラミと入浴、敗者の悲哀

私はシベリア生活の二十か月余、この間、入浴の記憶は一回しかない。それは引込線に入って来た入浴列

車のシャワーだった。

満州、樺太、北朝鮮からどんどん送り込まれる強制抑留者は、皆劣悪な条件の下でシベリア各地、遠くは中央アジアにまで送られたのだから、衛生を顧みる余裕はなく、日本人抑留者全員にシラミが蔓延したのは無理もない。シラミ、特に毛ジラミは発疹チフスの元凶なので、ソ連当局は自国民への伝染を恐れたのだから、我々の陰毛を剃れと命じ、一人一人軍医に検査させるとお達しが来た。

毛ジラミはいなかったが、私たち全員にたかったシラミは大変なものだった。何しろ着たきり雀なんだから仕方がない。四六時中もぞもぞし、褌袴や股下の縫目にはビッシリと胡麻つぶ大の卵が乳白色に光っていた。暇があれば戦友たちと世間話をしながらシラミを潰すのが日課だったが、そんなことではとても間に合わない。幸いラーゲリにはベチカがある。石炭ワゴンを逆さに伏せたベチカの上の方は真つ赤に焼けているが、下の方は赤くなっていない。シャツを脱いで広げ、裏の縫い目の部分をそこに押し当てるのだ。一

瞬、パチパチと音がして、シラミも卵もお陀仏となるが、下手をすると布地が黒茶色に焼けて、最悪、穴があいてしまう。だから当時我々の肌着は全員茶色で所々穴があいていた。しかしこんなことで退治できるものではない。ここかしこでポリポリゴリゴリ、我々の敵はここにもいた。ソ連当局も熱気消毒をするといって肌着を交換してくれるが、交換の肌着にも大抵ベチカの焦げ跡がついている。

そんなある日、入浴列車が二キロメートル程先に来たので、今から入りに行くという。喜び勇んで出発、林の中の引込線に大きな客車が二、三両、煙突から煙を吐いている。消毒のため肌着を脱がされ、素肌に軍服の元日本兵が寒さにブルブルふるえながら順番を待つ姿は、我ながら情けない。やっと順番が来て数人ずつ中に入ると、片側に湯槽、片側にシャワーが並んでいる。たしか洗面器二杯のお湯をもらったことは覚えていた。石鹸はなかったと思うが、これがシベリアでただ一回の入浴だった。

しかし我々がもっと驚いたのは、ラーゲリに帰ってからだ。腹ペコで帰って来たのに宿舎へ入れてくれない。長い間待たされてやっと中へ入ってみると、部屋の中は毛布、布きれ、食器用の空き缶などが散乱。我々の留守中、所持品の一斉検査、即ち略奪に遭ったらしい。字の書いてあるもの、愛読書、手帳の一頁であれ、入営の時贈られた寄せ書きの日章旗はもちろん、大切な故郷からの便りなども全部没収され尽くし、時計も万年筆ももう誰も持っていないだろうに、一体何を検査したんだろう。とにかくソ連兵の略奪は、輸送船から始まってラーゲリの中でも所持品検査と称して数回やられたのは、全く敗戦国の悲哀だった。

シベリアに入ってから一カ月の間、我々には何回となく「全員集合」がかけられ、寒風の広場に集められた。スピーカーもなく、はっきりとは分からなかったが逃亡者が捕まったらしい。殺されたのか、捕まって監獄送りになったのか分からなかったが、我々には罰として労働時間が二、三時間延長された。あまりの労

働の辛さに、作業用の斧でわざと手足の指を傷つけた。り、無意識のうちに凍傷にかかって手足を切断した戦友の話、山林の伐採で倒木から逃げ遅れ圧死するなど、不運な人の話はいくらも聞かされた。健康診断と称して白衣の女軍医の前ですっ裸になり、尻の肉をつままれて、その肉付きで健康度、栄養失調と判断された。とにかく飢えと寒さ、それに重労働、一旦体に変調を来したら、特に下痢でもしたらもうだめだ。見る間に痩せ細って入院だが、病院で死ねれば幸せだという。

九、ダモイラーゲリ

二回の厳寒を乗りこえた二十二年四月のある日、ダモイの情報で歓声が起こった。今度こそ……、けれど今までこんな情報で何度すっぱかされたことか……、まだ信用はできない。ソ連将校がやって来た。名前を呼ぶ。隊員の約半分の名前が呼ばれたが私の名前はなし。名前を呼ばれなかった連中は、どっと通訳のところに殺到するが結局ダメ。名前を呼ばれた者はすぐ荷物をまとめ出発して行った。腑抜けのようになった残

りの我々は、翌朝、どこへ行くとも知れずラーゲリを出た。

海が見えた、と思う間もなく大きなラーゲリが見えて来た。なんだか異様な雰囲気だ。というのは、建物のあちこちから聞こえてくるのは「インターナショナル」の大合唱。これは「ダモイラーゲリ」じゃないか、思わず大歓声が上がった。

ここは本当にダモイラーゲリだった。アルチョムを出た我々の隊は五十人ほど、今まで全く見知らぬ顔ばかり、我々は徹底的にバラバラにされてしまったのだ。それにしても先に出て行った連中はどうしたのだろう。ダモイに騙されて、また奥地へ連れて行かれたのかもしれない。我々は大丈夫だろうな。帰れるなら足を伸ばして寝られない部屋の狭さも問題じゃない。

隊長から注意があるとのこととで部屋の隅に集まる。

ここはソ連の手先となっている「アクチブ」が絶対権力を持っており、我々の運命は彼らが握っている。ここには一万人以上が集結しており、帰国船に乗れるのは二千人程度だから、どの部隊も必死だ。アクチブに

呼び出されて思想調査や口頭試問があるかもしれない。とにかくアクチブの心証をよくして帰還組に入れてもらうこと。部屋の壁いっぱいには共産党スローガンを貼ろう、「偉大なスターリン大元帥万歳」「ソ同盟こそ我が祖国、敵前上陸して全員入党」のたぐいだ。一番肝心なのはできるだけ大声で労働歌を歌うこと、何とかしてアクチブに気に入られなけりゃいかん、という話だ。

さあそれから、歌った歌った、朝から晩まで、ラーゲリ全体が競争の大合唱だ。日本へ帰ってから歌ったことはないが、メロディは死ぬまで忘れない。歌詞はたしかこうだった。

赤旗の歌

民衆の旗赤旗は 戦士の屍を包む

死屍しし硬く冷えぬ間に 血潮は旗を染めぬ

高くたて赤旗を その陰に誓死せいしせん

卑怯者去らば去れ 我等は赤旗を守る

インターナショナル

立て餓えたる者よ 今ぞ日は近し

覚めよわが同胞 はらから 暁は来ぬ

暴虐の鎖断つ日 旗は血に燃えて

海を隔てつ我等 腕結び行く かゝ

いざ戦わん いざ奮い立ていざ

ああインターナショナル わがもの

(前二行繰り返し)

我々は朝から晩まで声をからして歌い続けた、それも今はほろ苦い思い出となった。それにしてもこの歌の戦闘的なのはどうか、血とか屍とか鎖とか。国際共產主義の崩壊がなかったら、今ごろ日本はどうなっていたか？

とにかく海が見られるのはありがたい。この海の向こうには祖国日本がある。ここでアクチブの心証を害したらまた労働ラーゲリに逆戻りだ。さあもうひとふんばり、大声で歌おう。

こうして、我々はやっと帰還船に乗った。昭和二十

二年四月下旬だったと思うが、日にちは残念ながら忘れてしまった。船の名前は「永徳丸」。この船名は永久に忘れられるものではない。そして船尾に翻る「日の丸」、手を振って迎えてくれた白衣の看護婦さん、今でも目に焼きついている。同じ船の戦友は全然見知らぬ顔ばかり。家族は無事だろうか、どこに住んでいるだろうか、不安いっぱい。帰還だったが、「ご苦労様でした。お帰りのさい」の声に迎えられて舞鶴の土を踏んだ感激。日本、この日本の国民として生まれた喜びと感激がジーンとこみ上げてきた。

それにしてもソ連の悪辣さはどうだ。日ソ不可侵条約を一方的に破棄し、終戦目前に満州、樺太に侵入、暴虐の限りを尽くし、満州、朝鮮であらゆる工場設備、製品、民間人財産など根こそぎ略奪をほしきままにし、どさくさに紛れて北方四島を占領、さらに何十万という日本人を満州、朝鮮から連行、飢えと寒さと強制労働に何万という犠牲者を出した。この数字も信用できないが、ロシア、ソ連の言動は、三国干渉以来、誠実な日本にどれだけ煮え湯を飲ませたことか。

我々は「捕虜」ではない。戦場でないところから強制的に拉致され、酷寒・飢餓のシベリアで、その開発に血と肉を、そして中には命までも奪い取られた「強制抑留者」なのだ。

戦後五十年、このシベリアの悲劇は、絶対に風化させてはならない。

【執筆者の紹介】

大正十五年二月一日、名古屋市生まれ。

昭和十三年三月、名古屋市立明倫小学校卒業。同四月、市立名古屋商業校入学。

昭和十七年十二月、同校を繰上げ卒業し、東洋綿花株式会社（現トーメン）の中国派遣研修生となる。

昭和十八年二月、中国北京に渡る。北京の某全寮制私塾で約十カ月間、速成中国語教育を受ける。塾生は全員日本企業の研修生、合計約三十人。

昭和十九年一月、同塾卒業。東洋綿花株式会社（中国名・東綿洋行）中国河北省石家庄支店に赴任。石家庄東方約五〇キロメートルの一農村、晋県駐在員とし

て勤務。電気、水道、米の飯、何もない環境の下、中国服を着用し、中国人を使って綿花の収買に当たる。

八路軍ゲリラが横行して再三の襲撃に遭う。日本軍の出動を要請しての強制買収にも随行、殉職覚悟の仕事だった。同僚先輩の殉職、負傷も見聞。

昭和十九年秋、徴兵年齢の引下げにより、石家庄にて徴兵検査を受け合格。

昭和二十年四月二日、中国山東省張店駐屯の部隊に入隊。現地徴集初年兵約五十人、翌々日張店付近の分遣隊駐屯地に移動、初年度教育を受ける。ただし三八式歩兵銃は支給されず、鹵獲銃での教練。訓練は専ら対戦車肉弾攻撃。三カ月の訓練を終え一期の検閲を受ける。

昭和二十年七月、正式に部隊配属。北支派遣独立歩兵衣第四二九四部隊（第五十九師団、第五十三旅団四十三大隊）第三中隊の兵員となる。部隊は山東省泰安に旅団本部を置いていたが、二十年七月、北朝鮮咸興に移動。咸興にて八月十五日を迎え、玉音放送を聞くこととなった。

威興にて武装解除を受け、昭和二十年九月末、興南港よりソ連船にてウラジオに連行され、アルチョム収容所にて炭鉱労働に従事。

昭和二十二年四月末、ナホトカに移動、同年四月末ないし五月初め舞鶴港に帰還。

東洋綿花株式会社に復職。名古屋、大阪、四国の各店に勤務。昭和五十九年定年退職。

昭和六十年より帰国日本人孤児の日本語教師を担当。さらに中国人向け日本語学校二校の非常勤日本語教師を八年間、愛知県豊明市受入れの中国人技術研修生の日本語教師を七年間にわたってそれぞれ勤める。

全抑協愛知県支部の設立と共に入会。

平成十二年十一月、愛知県の「シベリアの労苦を語り継ぐ集い」に、「シベリア抑留アルチョムの実態」と題してトークを行った。

平成十三年、同支部改選において支部理事に就任、書記として会報の編集を担当中である。

(愛知県 沢野 良弘)

わが青春時代

(ウラルを越えてシベリア抑留の記録)

三重県 宇平 博

三重県飯南郡櫛田村安楽四〇番地、大正十四（一九二五）年五月四日、出生。昭和十七（一九四二）年三月、三重県立宇治山田中学校四年修了。昭和十七年四月、陸軍予科士官学校入校。昭和二十年三月陸軍航空士官学校卒業、航空司偵偵察学生。昭和二十年四月（六月、水戸陸軍航空通信学校入校。五月中旬頃、航空航空通信実修訓練のため双練にて新潟飛行場に向かい一泊、再び訓練実施後水戸飛行場に着陸し掩体に収容作業中、ロッキードグラマン戦闘機が急降下、敵操縦士の顔がはっきり見え、機銃掃射の態勢に入ったので側溝に伏せたが、弾道が十メートル近辺で走って行った。これが第一回の命拾いの一コマです。

昭和二十年六月三十日、満州第二航空軍第四二教育